きれいな夜空を見上げる。
あざやかな花を見かける。
透き通った海を見下ろす。
すてきな文章を読む。
他人の密やかな善行を知る。
日を跨ぐ頃。僕はベッドの上でそれらの時と同じ気持ちになった。
嬉しいとかそういうものではなくて、なんというか……なんとも言い難いような、どうだろうか、一番近しいのは穏やかであたたかな気持ち、というところだろうか。いや、信仰かもしれない。……はっきりとは言えない。よくわからない。
何はともあれ、ブラジャーを外して失われた豊かな双丘は、僕を残念がらせることはなく、むしろ嬉しさすら覚えた。そうまでして僕に魅力的に想われたいという気持ちの現れは、肉体的な特徴なぞよりもよっぽど多幸感を覚えることを、僕は知った。
「……幻滅した？」
彼女は薄い暗闇のなかで不安げに訊いてきた。
「そんなわけない」
僕は彼女の感じている不安を払拭するためだけに答えた。
それでも彼女は不安げに胸の前で手を絡ませている。そんな彼女に何ができるのかと考えるのと、傷つけないようにそっと抱きしめたのは同時だった。僕に恋のノウハウはない。だけど、そうするのが正解だとなぜか知っていた。
歯の浮くような言葉はいくらでも思いついたが、結局はこんな言葉しか出なかった。
「ありがとう」
何が「ありがとう」なのか、自分でもよくわからなかったが、安心してもらうにはその言葉が最適解だと思った。彼女は何も言わなかったが、あまりにもやさしい目を向けてきてから静かに身体の重さを預けてきたあと、ぎゅうっと僕の身体を抱きしめ返してきた。意外と力強かった。しかしそれは、想像していた女性の力としては、というだけであってむしろなんだか妙に気持ちよかった。当たる胸の感触のおかげの可能性は多分にある。
「こんな日が……」
ぽつりと言葉がこぼれた。見つめられるまでそれが自分のつぶやきだと気付かなかった。
わずかな間を置いてから気付き、そのままつづきをこぼした。
「しあわせな日がくるなんて思ってなかった」
驚きで目が丸くなる。そしてまたあまりにもやさしい目になった。
「……わたしも」
同意する彼女を、また抱きしめる。ことさら強く身体を預けられ、僕は彼女を抱きしめたまま後ろに倒れ込む。目が合う。やがて僕たちは互いの熱を共有した。